

## 創刊の辞

二〇〇五年五月、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、立命館大学末川記念会館の中に開設された。その開所式における白川先生の講演は、歴史に残ると言っても大げさではないほどの、深い学識に満ち、氣力に溢れ、集った多くの人々に感銘を与えるものであった。いまでも、その折の会場をつつんだ熱気や感動が、時に、蘇ってくるようにも感じられるほどである。

研究所は、二つの目的をもって開かれた。その一つは、白川先生の「東洋文字文化」研究を基盤にすえた学問の継承と発展をめざすこと、その二つ目は、この「東洋文字文化」学の啓蒙と普及とに関わる諸活動をすすめることである。そして、研究所は、『白川研究所便り』を年に一回発行し、『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』の刊行、立命館白川静賞の選考などを具体的な活動内容として掲げた。いわば、学術・研究部門と、文化事業としての教育・普及といった部門とを、この研究所は目ざしているのである。二〇〇六年六月には、第一回の白川静賞が決まり、その表彰も行われた。いよいよ研究所の活動が開始され、これからという時に、白川静先生は、二〇〇六年一月三〇日、満九六歳で逝去された。普通であれば、天寿をまっとうされたと言うべきかも知れないが、白川先生の場合は、そうは言えないように思う。「あと二年、いのちを下さい――父が病院でお医者様や看護婦さんに言っていた言葉です」と、津崎史さんはその追悼のご文章を始めておられる（「私の中の父」、『月刊百科』平凡社、二〇〇七・一刊）。先生の仕事への情熱は、体調を崩され、入院されても衰えることなく、燃えさかっていた。病室の天井の様子が原稿に見えると言われ、「活字があつて、ところどころに甲骨文字が見える。何が書いてあるのか」と、一生懸命見つめていました」と史さんは続けておられる。先生の頭の中では、これまでも増して実に多くの仕事のアイデアや計画が活動していたのであろう。「天寿をまっとう」されたのではないと記したのはこの謂である。しかしながら、白川先生の公にされた「東洋文字文化」研究の偉大さ、歴大さは、誰しもが認め、その学問世界の豊かさに圧倒されるで

あろう。私たちは、微力ではあっても、この先生の遺志を継いで、先生の思い描いておられた「東洋文字文化」学のさらなる研究と継承、そして発展とに努めなければならぬと、深い喪失感を抱きながらも、気持ちを新たにしようとしている。

『紀要』創刊号、五篇の論文、研究ノート一篇、訳注二篇という内容でもってようやく発刊の運びとなった。白川先生を哀悼する思いと共に、「東洋文字文化」学を世に問う決意も有している。大方のご批評を願う次第である。

立命館大学文学部長／立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所副所長 木村 一信